

## 先人の言葉から学ぶ（17）

### 幸福なるかな、心の貧しき者。天国は その人のものなり。・・・聖書（その2）

#### 5 山上の垂訓

##### (1) 垂訓を述べた時期と場所の推定

イエス・キリストは、30歳でバプテストのヨハネから洗礼を受けた後、聖霊により荒野に導かれ、40日間断食して祈られた。その間、悪魔から三度の試み（誘惑）を受け、それをことごとく退けたと先月書いた。この洗礼から断食を終えたイエスが救い主キリストとして宣教活動を行った期間を公生涯という。俗に言うならば突然の変身である。

荒野を出たイエスは、イスラエル北部のガリラヤ湖西岸の地で最初の教えを宣べられたと聖書に記されている。



ガリラヤ湖の遠望

この時、イエスの声掛け（召命という）により最初の弟子となる漁師のペテロとアンデレ兄弟、更にこれも兄弟でヤコブとヨハネ（バプテストのヨハネと別人）漁師がイエスに従った。

引続いて人々に福音を語られるとともに、病に悩む人たちを奇跡をもって癒し救われたので、噂を聞いた多数の群衆が遠方からも集まり、イエスにつき従うようになった。

イエスは群衆を見て近くの山に登って行かれた。その山とは、ガリラヤ湖北西に位置するカペナウム近郊の丘と推測されて、現在その場所は「祝福の山」と呼ばれ、丘の上に「山上の垂訓教会」が建てられている。

##### (2) 弟子と群衆

これ以後、文語訳聖書（大正改訳聖書）から引用したところはゴシック文字に、漢

字は当用漢字に倣い、仮名遣いは現代語にして進めていきたい。

聖書によれば、『イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給えば、弟子たち身許（みもと）にきたる。イエス口をひらき、教えて言ひたもう。』と情景を記している。

現代語にすれば、『イエスは従う群衆を見て、近くの山に登って行き、そして坐られた。弟子たちと群衆は次第にイエスの身近に集まってきたのである。そこで、イエスは口を開いて教えを語り始めた。』となるであろう。これが大衆の面前で行った記念すべき最初の説教であり、後の人たちは「山上の垂訓」と呼んだ。

しかも、キリスト教の柱となる教義を端的に組み立て、大衆に分かり易く、以後の説教で宣べる骨子を格調高く表明しているところ常人と大きく異なるところでなかろうか。概して、教祖たるお方は比喩が巧みで人を引きつける表現を用いる。

以下の項で、そのおおよそを記してみるのので、語り論す表現の非凡さを嘖みしめて頂ければ幸いである。

### (3) 最初の言葉

標題に掲げたのは「山上の垂訓」冒頭の言葉で、「幸福なるかな」で始まるのは以下の8つである。キリストによる救いを信じる者たちへの温かい思いやりが感じられる。その思いやりとは、救い主イエス・キリストを信じ、救い主に従う人々の幸福感を誘って語り掛けている。

この言葉の後に、教理の核心をなす言葉が聖書マタイ伝福音書の中で第5章から第7章まで続くのである。

幸福（さいわい）なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。  
幸福（さいわい）なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。  
幸福（さいわい）なるかな、柔和なる者。その人は地を継がん。  
幸福（さいわい）なるかな、義に飢え渴く者。その人は飽くことを得ん。  
幸福（さいわい）なるかな、憐憫（あわれみ）ある者。その人は憐憫を得ん。  
幸福（さいわい）なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。  
幸福（さいわい）なるかな、平和ならしむ者。その人は神の子と稱（たたえ）られん。  
幸福（さいわい）なるかな、義のために責められたるもの者。天國はその人のものなり。

いささか抽象的な表現法と言えるが、これら言葉の奥と裏を感じ取ってほしい。

我が国の場合なら、親鸞聖人（1173～1262年、浄土真宗の宗祖）が著した「歎異抄」の中に、『善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや』（善人でさえ救われるのだから、悪人はなおさら救われる）という逆説的な述べ方をしているのも知っておくべきであろう。

#### ア 幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。

己の心の貧しさを知り、ただ神により頼む人々は幸いである。天国はその人の

ものだから。

**イ 幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん**

悲しんでいる人は幸いである。神がその人たちを慰めてくれるから。

**ウ 幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を継がん。**

優しく慈しみ深く、柔和な人は幸いである。神はその人たちに約束の領地をくださるから。

**エ 幸福なるかな、義に飢え渴く者。その人は飽くことを得ん**

御心に適う生活に飢え渴いている人々は幸いである。それを神は満たしてくれるから。

**オ 幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん**

憐れみ深い人々は幸いである。神は憐みを受け入れてくれるから。

**カ 幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん**

心の清らかな人々は幸いである。その人は神の心を見ることができるから。

**キ 幸福なるかな、平和ならしむ者。その人は神の子と稱えられん**

平和を実現する人々は幸いである。その人は神の子と呼ばれるであろう。

**ク 幸福なるかな、義のために責められたるもの者。天國はその人のものなり**

御心を行って迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものだから。

イエスは、この8つの「幸福なるかな・・・」を説いた後、『我がために、人汝らを罵り、また責め、詐（いつわ）りて各様（さまざま）な悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。喜べよろこべ、天にて汝らの報いは大なり。』と言い切り、次々と教えを説くのである。

**(4) 続いての教え**

**ア 汝ら地の鹽（塩）なり、鹽もし効力を失わば、何をもてな之（これ）に鹽すべき。**

外にすてられて人に踏まるのみ。汝らは世の光なり。山の上にある町は隠ることなし。

地の塩といっても岩塩のことではない。塩は口から入り生き物の生命維持に欠かせない重要なものとしての譬えである。また、自然の光は太陽の恵みあり、陽光がなければ生命は維持できないであろうし、焚き火や燈火を用いるのは人間と他の生き物との違いを示す。イエスは信仰する者に対して、生存に欠かせない存在となるようにと教える。

**イ われ律法または預言者を毀（こぼ）つために来たれりと思ふな。毀たんとて来らず。反（か）って成就せんがためなり。**

キリスト教は、世の中の仕組みや旧来の宗教をことごとく打ち壊し改変するための教えではない。全てが成り立って、あらゆる民人の幸福成就のために、イエスは人の身となって来たのだという。とてつもなく大きく、新しい考えを提唱すれば、とかく警戒心と猜疑の目で見られる。宣教を始めて処刑されるまで約3年半のイエスは、正に懷疑と偏見、既成のものから排除される日々であった。

因みに、仏陀の布教は、35歳で悟りを開き80歳で没するまでとなり45年の活動年数である。

ウ 「殺すなかれ、殺す者は審判（さばき）にあうべし」と云えるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあうべし。また兄弟に対（むか）いて、愚者よという者は、衆議にあうべし。

殺人は当然あってならないこと、仏教でも「不殺生戒」は第一番目に挙げられている。昨今の最も悲しく聞くに堪えない出来事は、親が小さい我が子に食事を与えなかったり、暴力を振って殺してしまう身勝手からの殺人報道である。自分がなぜこの世に生を受けたかさえ知らない世代、子供を作る資格も生きる資格もない疎ましい人たちといえる。

この項の兄弟とは、肉親の兄弟以外に身近な人たちを指す。

エ 姦淫するなかれ、と云えることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懐（いだ）きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。

イエス様は、仮の姿として人間の身を借りている神であるから、さすが厳しいことを言う。生物の性は本能（永遠なる種の持続）が出発点かもしれないが、欲望の中で最も身近に付き纏うであろう部分であるかもしれない。仏教でいう「不邪淫戒」は「邪（よこしま）に淫らなことを妄想した、行ってはならない」と解され同じ戒めである。難題かもしれないが、さて貴方はいかに。

オ 「いつわり誓うなかれ、なんじの誓いは主に果たすべし」と云える事あるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、一切ちかうな、天を指して誓うな、神の御座（みくら）なればなり。地を指して誓うな、神の足台なればなり。

人間は髪の毛一本だって白くも黒くもできない身であるから、ましてや誓いを立てても決意を表明して達成（実行）できない場合が多い。だから、やたらに誓いを立てて身の恥をさらすのも考えものである。「不言実行」などの言葉も生まれた背景も納得できる。

それに続いてイエスは、ただそうだと思えば「然り」、違うと思えば「否」と言えばよいのだという。

出来もしない誓いは偽りを増幅させ、可能と思って誓っても結果として十分な責任を果たせなければ自他を裏切るばかり。本当の誓いは、主たる神を信じ生涯付き従うことで十分との教え。

カ 「目に目を、歯には歯を」といえることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗（さから）うな。人もし汝の右の頬を打たば、左をも向けよ。なんじを訟（うった）えて下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ。人もし汝に一里行くことを強いたら、二里を行け。請う者には与え、借らんとする者を拒むな。

この言葉が、キリスト教の博愛精神につながった一つの理由と推測できる。

しかし、現実問題としては、世界人口の3分の1がキリスト教信者であることは、この精神が浸透し守られているならば、世界に戦争はなく平和となり、貧富や食糧事情の差は埋まり、互いに悪口を言い合わない世の中になるはずなのにと考え込んでしまう。

なお、「目に目を、歯には歯を」は旧約聖書の出エジプト記などにも見られるが、元はハムラビ法典[バビロン第一王朝第6代の王ハムラビ(在位BC 1728～1685頃)が定めた世界最古の法典といわれる]にある一つで、受けた害に対して同等の仕打ちをもって報いることを意味する。

一里を行けと言われたらに入り行け、借りようとする者を拒むとなれば、誠に難題である。

- キ 「汝の隣を愛し、汝の仇を憎むべし」と云えることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、汝等の仇を愛し、汝等を責める者のために祈れ。これ天にいます汝等の父の子とならんがためなり。天の父は、その日(陽)を悪しき者のうえにも善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。これも前項と同じと思って良いだろうが、誰がこれらを本当に実現することを目指しているだろうか。むしろ、これと反対の生き方をしている人ばかりである。

- ク 汝ら見られんがために己(おの)が義を人の前にて行はぬように心せよ。然らざれば、天にいます汝らの父より報いを得じ。さらば施濟(ほどこし)をなすとき、偽善者が人に崇(あが)められんとて会堂や街(ちまた)にてなすごとく、己が前にラッパを鳴らすな。

ここ数年、タイガーマスクを名乗り隠れた善行を行う奇特な人の話題がそこかしこにあった。徳のない人は、同じ出費をするなら、目立つように施しを行うのが我が身のためと思っているようである。徳のある人は己の善行を誇ることはない。

- ケ 汝らの父は、求めぬ前に、汝らの必要なる物を知りたもう。この故に汝らはかく祈れ。「天にいます我らの父よ、願わくは御名を崇(あが)められん事を。御国の来らんことを。御意(みこころ)の天のごとく地にも行われん事を。我らの日用(にちよう)の糧(かて)を今日も与え給え。我らに負債(おいめ)ある者を我らの免(ゆる)したる如く、我らの負債をも免し給え。我らを嘗試(こころみ)に遇(あ)わせず、悪より救い出し給え」

これは「主の祈り」といわれ、主に付き従う者(信者)に対して祈るときのお手本となる言葉といえる。実際後に、一同で手を組み「主の祈り」を唱和することが多い。

- コ 汝ら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容(おももち)をするな。彼らは断食することを人に顕(あらわ)さんとて、その顔色を害(そこ)なうなり。

イスラム教など、今に至り全ての信者が定められた断食は行われている。古から重要な義務であり修業の一つに挙げられる。これ見よがしに断食する姿をイエスは嫌った。

**サ** 汝ら己がために財宝を地に積むな、ここは蟲と錆とが損ない、盗人うかがいて盗むなり。汝ら己がために財宝を天に積み、かしこは蟲と錆とが損わず、盗人うかがいて盗まぬなり。

イエスは全てに厳しい人であるが、それはただ厳しいだけではなく、人としての在り方を説いている。イエスの毅然たる心に裏打ちされた教えから、日常、私たちが学ぶべきところ甚だ多いと心得て、それを人生の柱として活かしたいものである。

**シ** 我なんじらに告ぐ、何を食らい、何を飲まんとな生命（いにち）のことを思い煩うな。何を着んと体（からだ）のことを思い煩うな。命は糧（かて）に勝れり、体は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収（おさ）めず、然るに汝らの天の父は、これを養い給う。

衣食に拘る気持ちは、押し並べてありそうなこと。一つが手に入れば、次の物へと欲望は限りなく増幅するのが常である。美味しい食べ物だって実に魅力的である。そかし、地球上には飢餓に苛まされている何億人もの人々がいるのも事実である。

また、「衣食足りて礼節を知る」（出典：管氏）という言葉さえあるほど、衣食は欲望との関係が密接といえる。

イエスは永遠なる命を得ることの方が大切で、その日その日が事足りるならばいいのではと言っている。

**ス** 汝ら人を審（さば）くな、審かれざらんためなり。己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量（はかり）にて己も量らるべし。

審判などと大げさにいわなくても、現実には我が身を顧みることなく、他者のことばかり目につく傾向が強い。それも良いところではなく、欠点やしくじり探しばかりでないだろうか。噂話も悪口の方が口は滑らか活気づく。反省したいものである。

**セ** 聖なるものを犬に与うな、また真珠を豚の前に投ぐな。恐らくは足にて踏みつけ、向き回りにて汝らを噛みやぶらん。

「豚に真珠」「猫に小判」は良く聞く話、聖書が語源でなく古くからあった譬えである。価値（又は信仰心）を分かる人と、分からない人の違いは何時の世にも混在している。だから、勉強したり修業したりする必然性がある。

**ソ** 求めよさらば与えられん、尋ねよ、さらば見い出さん。門を叩け、さらば開かれん。全て求める者は得、たづぬる者は見出し、門をたたく者は開かるなり。

何と格調高い言葉であろうか。読みながら胸にジーンと響いてくる。

良き説法を聞いても、その人に信じ求める気持ちがなければ、何の前進があろう

か。道を志す者も同様で、ひたすら求道する意欲と持続できる心、歩む道を絶対と信じて進まなければ道は開かれない。信者でなくても、この一節は暗誦してほしい。

タ 狭き門より入れ、滅（ほろび）にいたる門は大きく、その路は広く、これより入る者おおし。生命にいたる門は狭く、その路は細く、これを見出す者すくなし。

これも前項と同じで、名言だと思う。安易な行動には慣れ易く、樂することを探れば沢山見つかる。真実を探求するならば難儀を覚悟しなければならないのが世の常であろう。

チ 我がこれらの言葉をききて行うものを、磐の上に家をたてたる慧（さと）き人に擬（なずら）えん。我がこれらの言葉をききて行わぬ者を、沙（すな）の上に家をたてたる人に擬（なずら）えん。雨ふり流（ながれ）みなぎり、風ふきてその家をうてど倒れず、これ盤の上に建てられたる故なり。すべて我がこれらの言（ことば）をききて行わぬ者を、沙（すな）の上に家を建てたる愚かなる人に擬（なずら）えん。雨ふり流みなぎり、風ふきてその家をうてば、倒れてその顛倒（たおれ）はなはだし。

筆者が山形大学学生の頃、ドイツ語教授で内村鑑三に傾倒しているキリスト者がおられた。その先生が聖書を読む会としてサークルを指導され、その名は「盤上会」といった。筆者も誘われて数度参加したけれども、空手道部の活動が専らだったから入会はしなかった。でも、とてもよい名だなと思った。

「砂上の楼閣」という言葉もあるように、土台が脆弱ならば何も役をなさない。これは人間（人物）だって同じであろう。

## 終わりに

聖書には、今回は取り上げなかったが「人はパンのみに生きるに非ず」とか、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、もし死なば、多くの果（み）を結ぶべし」のように、貴重な言葉が随所に満ちている。今回、暫く振りに聖書を紐解いて、実に爽やかな気持ちになったことを報告しておこう。

平成24年（2012年）1月から、このシリーズを18回にわたって執筆してきた。

タイトルが「ワンポイントレッスン」であり、大部分が空手道から逸れたのではと思われがちだが、そうではない。空手家としての精神性の在り方を提言し、広く素養を深めようとする意欲を喚起したかったからである。

一先ず、この「先人の言葉から学ぶ」はこれをもって終了したい。同じ趣旨から書きたい言葉については、別の形で発表したいと思っている。

次回以降であるが、空手道に対する筆者の考え方と、指導上の留意点を連載したい。

特に、市販されている空手道教本等とは内容的として同等の部分もあれば、一線を画する表現が発生すると思っている。

今後も、せいぜい「ワンポイントレッスン」コーナーを開いて頂きたいと希っている。

おわり